

能の味わい

能は三つの正面を持つ舞台で演じられる。控えの間から延びる「橋掛」は、単に舞台に向かう通路ではなく、たとえば死者の世界とこの世といった二つの異なる世界を結ぶ意味をも合わせ持つ。舞台背景には老松が描かれ、橋掛にそって三本植えられているのも松で、松が自然の背景を代表するかのように象徴的に用いられている。こうした舞台の上で演じられる能の登場人物は、シテ、ワキ、ツレ、子方、アイから構成され、多くの作品においてワキは諸国をめぐる旅の僧であって、彼が眠っている間に見る夢に出てくるシテの語りが作品の中心となる。能の作品は、神、男、女、狂、鬼を主役とする5種類に分類でき、演能が終日にわたった時代には神に始まる5本の作品が演じられた。近年は狂言を間に挟んだ2本立の公演が中心である。一つの作品が一回上演されると、同じものは何年、何十年先まで上演されないという、まさに一期一会が能の舞台である。

能においては、最小限の動きこそが美しいとみなされる。さらわれた息子を探して遥か京都から旅してきた母は東のはてに横たわる隅田川をみて、長い旅路を振り返りつつ「遠くも来ぬるものかな」と謡いながら一步踏み出す。その踏み出す一步には、そこに至るまでの何千里の道が意味されていて、ほんのわずかの動きの中に踏破した距離とシテの脳裏に殺到する悲しい思いが垣間見えるのである。またシテは能面を被ることで自らの表情を見せないが、顔の向きや傾きによって能面に陰影が生まれ、まるで生きている人の表情のように心中の思いを表わす。

1374年、観阿弥、世阿弥が今熊野神社の演能において将軍義満の庇護をえて、一躍当時の宮廷文化に置き替わるものとして採択された能は、当時の知識層が堪能できるだけの要素を秘めた新しい芸術であった。そのため、語りの中に散りばめられた和歌を始めとする上層階級の文化的知識、教養、遊びを前提として物語が繰り広げられる能を理解するためには、幅広く日本文化の素地を持つ必要がある。

実演を盛り込みながら行われた講演のあと、参加者から能における女性の位置づけ、最小限の言葉の意味、笛の名が埋め込まれた『敦盛』の「笛尽くし」の一段の理解の仕方などについてコメントがあり、それを糸口としながら、能の味わい方についての議論がさらに繰り広げられた。ぜひ一度、能の鑑賞に足を運びたいと思いながら幕を閉じた茶話会であった。